

紀 要

第 27 号

2014. 3

公益財団法人滋賀県文化財保護協会

湖西地域における山寺の城郭化

小林裕季

1. はじめに

近江は「日本城郭史の縮図」と称されることもあり、非常に多くの城郭が築かれた地域である。近江の城郭には、山寺が城郭化する事例が多いことも特徴のひとつとして挙げられ、既に多くの論考で指摘、事例の報告がなされている(中井1997・滋賀県教育委員会1991・1992など)。観音寺城や弥高寺、湖東三山などが著名な事例であるが、このような山寺の城郭化という動向は湖西地域においても確認されている。湖西地域では15世紀後半頃に多くの山寺が衰退傾向にあり、それに入れ替わるように武家勢力の動きが活発化してくる。

本稿では山寺が城郭化されるひとつのモデルとして、湖西地域での動向を具体例に検討を進めたい。なお、本稿で取り上げる湖西地域とは、高島市(旧高島郡域)、大津市北部(旧滋賀郡域)を対象とする。

2. 湖西地域の城郭化された山寺(図1)

湖西地域では比良山系とそこから派生する丘陵地を中心に多くの山寺が築かれる。高島郡域では通称「高島七カ寺」として挙げられる有力寺院の大半が山寺であり、滋賀郡域においても石垣を多用するダング坊遺跡や歓喜寺遺跡などの山寺が所在する。これらの山寺は戦国期を中心に城郭化していくことが指摘され、後述する清水山城や上寺城といった湖西地域の城郭を事例のひとつとして、「山寺」と「城郭」の平面構造やその与えた影響について論じられている(蔭山1994・中西2004)。

まずは、山寺内に築かれた城郭遺構を中心に概観したい。

日爪館遺跡・南谷遺跡(日爪城・大慈寺)⁽¹⁾

〔高島市新旭町饗庭〕(図2・3)

概要 饗庭野台地東側の丘陵上に立地し、大慈寺に比定される南谷遺跡が斜面部に、日爪城が背後の尾根上に築かれる。南谷遺跡はブッシュが激しく遺構の確認が困難であるが、少なくとも20カ所程度の平坦面が確認され、土塁や堀によって区画される。遺構の範囲は、図化されている範囲よりも北側へさらに広がり、南側は後世の土取りによって削平されてしまっているため遺構の南限は不明である。

永禄年間(1558～1569)には山門の代官であった吉武耆岐守の子息が「饗庭三坊」と呼ばれ、西林坊・定林坊・宝光坊が饗庭の村々に分かれ住み、そのうち西林坊が日爪村に居住したとされる。

城郭遺構 南谷遺跡背後の尾根上に日爪城として築かれ、東曲輪群と西側の主郭に大別される。東曲輪群の東端に大

規模な堀切と土塁を、主郭には西側にL字状の土塁と4条の堀切により厳重に防御する。16世紀中頃に浅井・朝倉氏もしくは高島七頭の影響を受けて改修された可能性が指摘されている。また、日爪城と饗庭三坊との関係を考える資料として、元亀3年(1572)の「明智光秀書状写」『細川家文書』に「饗庭三坊の城下まで放火し、敵城三カ所落去した」との記載がある。

清水山城遺跡・清水山遺跡(清水山城・清水寺)⁽²⁾

〔高島市新旭町熊野本〕(図4)

概要 饗庭野台地南側の丘陵上に所在し、「高島七頭」の惣領家である越中氏の居城とされる。山腹斜面部には清水寺の寺坊跡を利用して屋敷地とした並列的に配置される平坦面群や、主郭を中心に三方へのびる尾根上に展開する山城部分など多くの遺構が残る。主郭などで発掘調査が行われ、遺跡周辺を含めた総合的な景観復元が進められている。

清水寺については、「目安等諸記録書抜」『北野天満宮史料』に比叡山西塔の末寺であったことが記載される。15世紀後半頃に天台宗であった清水寺が浄土真宗に改宗したと伝え、延徳3年(1491)には北野社が清水寺極楽坊を買得している。清水寺の衰退に伴って越中氏が徐々に寺域に移動・共存しつつ尾根上を中心に城郭機能を備え、清水寺の構造を継承する形でゆるやかに進出したと指摘されている。

城郭遺構 清水山城の主要部は清水寺の立地する斜面背後の尾根上に展開し、最高所の主郭から南西の尾根にそって二郭、三郭が連続する。畝状空堀群や堀切といった城郭遺構が多く残る。主郭の発掘調査では六間×三間の礎石建物跡が検出され、1550～1570年頃を中心とする土器類が出土している。

本堂谷遺跡(井ノ口館・大宝寺)⁽³⁾

〔高島市新旭町熊野本・安井川〕(図5)

概要 清水寺の寺域から南西の西ノ谷川を挟んだ緩斜面上に立地する。遺跡の中央部は宅地造成によって失われているが、土塁や堀で囲まれた方形区画群が残り、本堂谷遺跡一帯を「大宝寺山」と呼ぶことから大宝寺の寺坊群であると考えられている。清水山城と同様に、越中氏が大宝寺の改修に関わったと指摘される。

城郭遺構 遺跡全体を土塁と横堀で囲い、北側は二重に堀と土塁が廻る。東側は西ノ谷川の急傾斜に接しているが、土塁と堀が築かれる。これらの土塁と横堀は防御という役割のほか、寺域を画する結界とも理解されている。

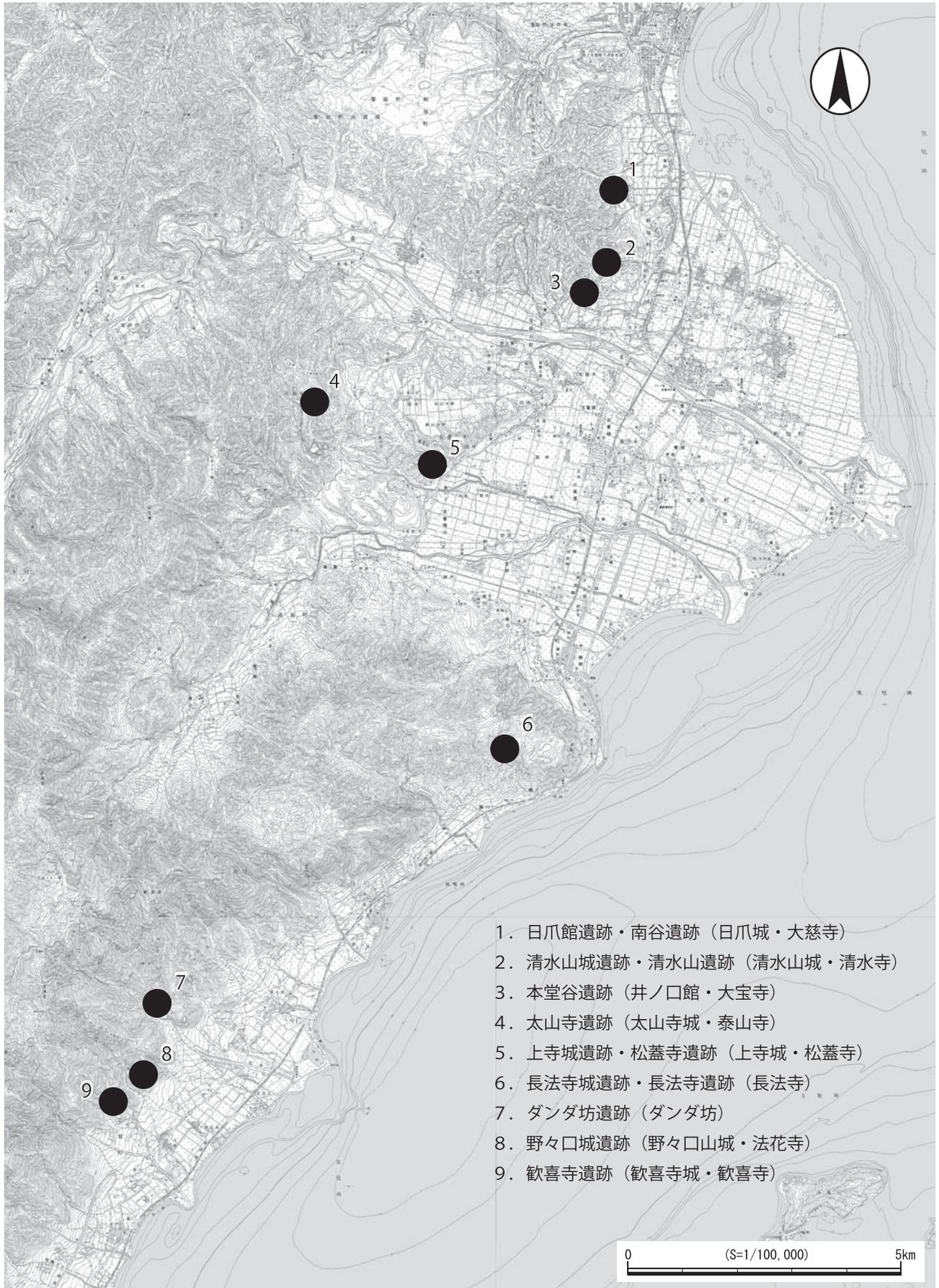


図1 城郭遺構を有する山寺

太山寺遺跡(太山寺城・泰山寺)⁽⁴⁾

〔高島市安曇川町田中字泰山寺〕(図6)

概要 比良山系最北端部にあたる泰山寺野丘陵に所在する。伝承によれば太山寺は聖徳太子による創建と伝えられ、山麓集落には聖徳太子像や太子信仰に関わる絵画なども伝えられる。中世文書である『葛川明王院史料』には太山寺は葛川明王院の頭役に入るなど、葛川修験の一道場として機能していたとされる。文明16年(1484)に寺坊の売券がみられ、慶長7年(1602)の田中郷の検地帳には荒畠地の地字名として実松坊、法泉坊、奥院、大仙房、梅本坊などが記載される。

遺構は阿弥陀山の南中腹より南方に延びる尾根上の通称「御屋敷」を中心に、八田川の流れる谷筋を挟んで対面する、緩やかな尾根上にも遺構が広がる。「御屋敷」側の遺構内で最も大きな平坦面には、3か所の方形に石積みされた基壇が残り、礎石も残存する。基壇の残る平坦面の下方には方形に近い形状の平坦面が並列的に配置され、土塁や石垣で明確に区画する。さらに下方には南東の谷に向けて放射状に不整形な平坦面が展開する。谷筋を挟んで対面する緩やかな尾根上には不明瞭な平坦面が多く残り、石仏も残される。

城郭遺構 石積み基壇の残る平坦面が主郭と考えられ、寺院遺構が残る尾根上に重複して城郭遺構が築かれる。主郭背後と中央付近に堀切が確認される。また、竪堀や虎口状の遺構がみられる。近隣に割拠していた「高島七頭」の横山・田中・朽木氏の領地境界に位置することから、三者のいずれかによる築城とされるが、詳細は不明である。

上寺城遺跡・松蓋寺遺跡(上寺城・松蓋寺)⁽⁵⁾

〔高島市安曇川町田中字上寺〕(図7)

概要 泰山寺野丘陵南東に所在する上寺集落背後の丘陵上に立地し、現在は観音堂一宇が残る。『高島郡誌』には天平3年(731)に僧良弁によって創建され、興福寺末寺であったのを平安時代に天台宗へ改宗したとする。「目安等諸記録書抜」『北野天満宮史料』に、嘉吉元年(1441)には松蓋寺が比叡山西塔末寺であったことが記載される。文明12年(1480)の売券に「松蓋寺北谷坊」、天文11年(1542)に「松笠(蓋)寺連載坊」の名が記される。

遺構は谷の斜面部に広がる平坦面群と、北西より延びる支尾根上に造成された遺構群の二つに大別される。斜面部に広がる遺構は、現観音堂が残る西端の平坦面から東側および南側に向けて、方形に区画された平坦面が並列的に並ぶ。特に東側の平坦面は、石垣は築かないが土塁や明確な段差をもって意識的に区画する。中心部から離れるにつれて不明瞭な区画の平坦面が散見され、遺構の東端には墓域が広がる。

城郭遺構 「高島七頭」の田中氏の城とされ、尾根上に城

郭遺構が築かれる。当遺構内の最高所に築かれた曲輪が主郭とされ、高い切岸と周囲に土塁や空堀を巡らせ、北西の尾根筋を堀切で遮断する。

上寺城は『信長公記』に元亀元年(1570)から天正元年(1573)の間に「田中城」として三度登場する。織田信長が元亀元年の朝倉攻めの際に当時浅井氏の勢力下にあった「田中城」に逗留し、その8日後に浅井氏の謀反が起こる。次に元亀3年(1572)には志賀・高島郡の浅井・朝倉軍を攻めるために明智・中川・丹羽の諸将に付城を設けて木戸・田中の両城を看視させる。そして元亀4年(1573)に信長は彦根松原において建造した大船で高島郡に攻め寄せ、後述する長法寺に近接する打下城を陣所に木戸・田中両城を攻略するなど浅井方の勢力を掃討したとする。

長法寺城遺跡・長法寺遺跡(長法寺)⁽⁶⁾

〔高島市鶴川〕(図8)

概要 比良山系北東部の長宝寺山と呼ばれる丘陵上に所在し、9世紀中頃から15世紀中頃まで繁栄した山寺である。文明3年(1471)の売券に「長法寺大品坊」とあるのを最後に消息は不明となる。長宝寺山中の南北に延びる尾根上から谷の斜面部にかけて遺構が展開し、斜面部では本堂跡からのびる直線道路や石垣を備えた僧坊跡などの寺院遺構が残る。

城郭遺構 斜面部の遺構に対し、城郭施設と考えられる遺構が残るのは、長法寺の東側の尾根上である。堀切や虎口といった防御施設の可能性がある遺構が築かれる。北側には、東側から長法寺へと至る道が堀切であった可能性も考えられる。南側には喰違虎口状に導線を屈曲させる遺構がみられる。中央付近の土塁は、平入り虎口として機能していた可能性も考えられる。直線距離で約350m離れる打下城に関連する遺構とする説もある(滋賀県教育委員会1991)。

ダング坊遺跡(ダング坊)⁽⁷⁾

〔大津市北比良〕(図9・10)

概要 ダング坊遺跡は釈迦岳と堂満岳に挟まれる尾根の傾斜変換点付近に立地する。遺構は約550m×約150mもの広範囲に広がる比良山系最大級の山寺であるが、沿革については後世の伝承などが残るが不明な点が多く、全体像が謎につつまれた山寺である。石垣や石塁、段差によって区画された平坦面群が数多く残り、それぞれ通路が接続して複雑な平面構造を呈する。

城郭遺構 遺跡最奥部に位置する庭園遺構と称される部分に城郭遺構がみられる。庭園遺構のある平坦面への入口部分には石垣によって枳形虎口を築き、平坦面の背後には土塁と堀を設ける。

野々口城遺跡(野々口山城・法花寺)⁽⁸⁾

〔大津市南比良字土山〕(図11)

概要 法花寺は弘安3年(1280)の裏書のある『比良荘絵図』にも描かれ、野々口山城と重複する地点に寺地が比定されている。沿革は不明であるが、旧志賀町北浜に所在する千手院観音堂は、元は法華谷(法花谷)にあり、元亀2年(1571)に焼失したのち現在地に再建したと伝えている。法花谷の地名は嘉禄2年(1226)の木戸荘と和邇荘の境争論の際に、「法花谷北」を木戸荘の領地としたとその名称が見え、遅くともこの頃にまで遡るものとされている。また、千手院観音堂の本尊である千手観音立像は平安時代後期のもので、12世紀半ば以降には降らないとされている。これらのことから法花寺には千手観音を尊像とした単一堂宇が存在していたことが推測される。

城郭遺構 野々口山城は『近江輿地志略』「野々口丹波守城屋敷遺跡」の項の記述からも、法花寺の所在地に比定される丘陵に一致し、寺地を踏襲・改修して城郭化されたと指摘されている。東・南・西の三方が急斜面となり、北側の尾根筋は堀切で遮断する。平坦面内には基壇状の高まりがみられ、その前面に空地が確保される。この平坦面の背後にはL字状の土塁を築く。

歓喜寺遺跡(歓喜寺城・歓喜寺)⁽⁹⁾

〔大津市大物字寺山〕(図12)

概要 現在、薬師堂が立地する字寺山一帯が歓喜寺の故地であったと考えられている。歓喜寺は『比良荘絵図』や『葛川明王院文書』をはじめとする文献史料にその名がみられる。15世紀中頃には寺院は衰退傾向にあったとみられる。遺構は、石垣を有する方形区画の平坦面が並び、現薬師堂より北東の谷筋には不明瞭な平坦面群や石列を伴う集石遺構が確認される。近世以降も石垣などを大規模に改修していたとみられ、規模は縮小するが、その後も寺院として人の手が加わっていたと考えられる。

城郭遺構 谷筋の歓喜寺の遺構を踏襲した歓喜寺城は、3条の大規模な堀切や堅堀が特筆される。また、歓喜寺城を見下ろす東側の尾根上の2つの小ピークに歓喜寺山城が築かれ、堀切や堅堀が残る。

3. 平面構造と築城主体

本稿で取り上げた城郭化した山寺には、Ⅰ型：寺院遺構背後の尾根上に城郭遺構が存在し、二者が分化されているもの、Ⅱ型：寺院遺構内の一部に城郭遺構が存在する、分化の不十分なもの、Ⅲ型：寺院遺構と城郭遺構が重複して一体となるものの3型に分類できる。Ⅰ型は日爪城、清水山城、上寺城、歓喜寺城が、Ⅱ型は長法寺、ダング坊が、Ⅲ型は井ノ口館、太山寺城、野々口山城がそれぞれ該当する。

Ⅰ型は中西氏が指摘した、山寺が斜面及び谷部に、城郭はピークや尾根上を中心に展開するタイプである(中西2004)。清水山城は高島七頭の惣領家である越中氏が城主であったとされ、16世紀中頃には清水寺や大宝寺の寺坊を利用するかたちで屋敷地としたとされる。清水寺は15世紀末頃には衰退が始まっていたことは確実で、16世紀に入ると越中氏の築城の動きが活発になる。しかし、築城が活発化する時点で廃絶していたわけではなく、規模は縮小されながらも、寺院部分には大きな改変は加えず、徐々に進出していったことが指摘されている。

松蓋寺も清水寺と同様に15世紀末頃から衰退がはじまり、16世紀中頃には背後の尾根上に高島七頭の田中氏によって城郭施設が築かれる。上寺城とみられる「田中城」は『信長公記』にも3度登場し、永禄年間の六角氏の衰退に乗じて高島郡にも進出してきた浅井氏の勢力下にあったこともわかっている。

大慈寺に比定される南谷遺跡の背後の尾根に築かれた日爪城は、清水山城と同様に16世紀中頃に浅井・朝倉氏もしくは高島七頭の影響を受けて改修された可能性が指摘され、大慈寺の寺坊を利用して屋敷地としたとされる。しかし、元亀3年(1572)の「明智光秀書状写」『細川家文書』には「饗庭三坊」の城下を放火したとの記述があり、大慈寺の所在した日爪村は、「饗庭三坊」の西林坊と呼ばれた天台山徒が居住したと伝わるため、僧名を冠する人物が城主であった可能性が考えられる。

歓喜寺については、歓喜寺の寺坊を踏襲して城郭化し、近世以降も寺院として修復・改修が行われていることから、寺院勢力が城郭化に関わったことが推測される。

Ⅱ型にあたる長法寺は、谷部の寺院遺構に対する東側の尾根上の遺構が城郭遺構である可能性が指摘できるが、防御性や立地によるこの地の重要性に乏しく、谷部とは性格が異なる寺坊であったと考える。ダング坊も遺跡の最奥に築かれた遺構の前後に石造りの枡形虎口や土塁と堀を設けるが、こちらも防御性に乏しく、前後のみを象徴的かつ局部的に城郭化していることから、戦に備えたものではなく、館のような構えを施した寺屋敷であったと推測される。

Ⅲ型の井ノ口館は、大宝寺の寺坊を利用するかたちで屋敷地あるいは清水山城の出城として機能していたと指摘される。大宝寺の城郭化も清水寺と同様に、越中氏により従前の空間構造を取り込んでいったものとみられる。

太山寺は、太山寺城に対面する尾根上には城郭遺構が認められず寺院遺構を残す。文献史料の記述からも衰退しつつも寺院が存続していた可能性が示唆されるが、寺院の中心部を一体化して城郭遺構が築かれる。築城者については立地から考えて高島七頭の横山・田中・朽木各氏のいずれかであるとみられるが、その性格を結論づけるには資料不足である。ただし、主郭とみられる平坦面内には基壇が残

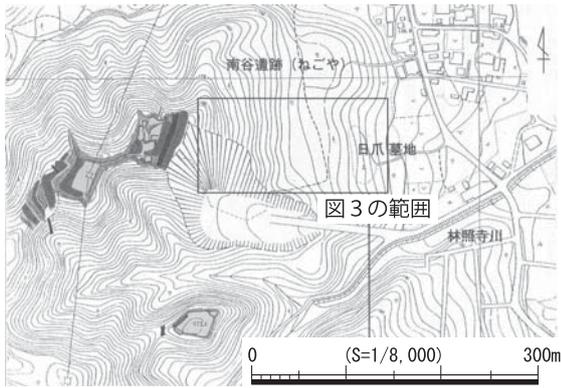


図2 日爪城概略図

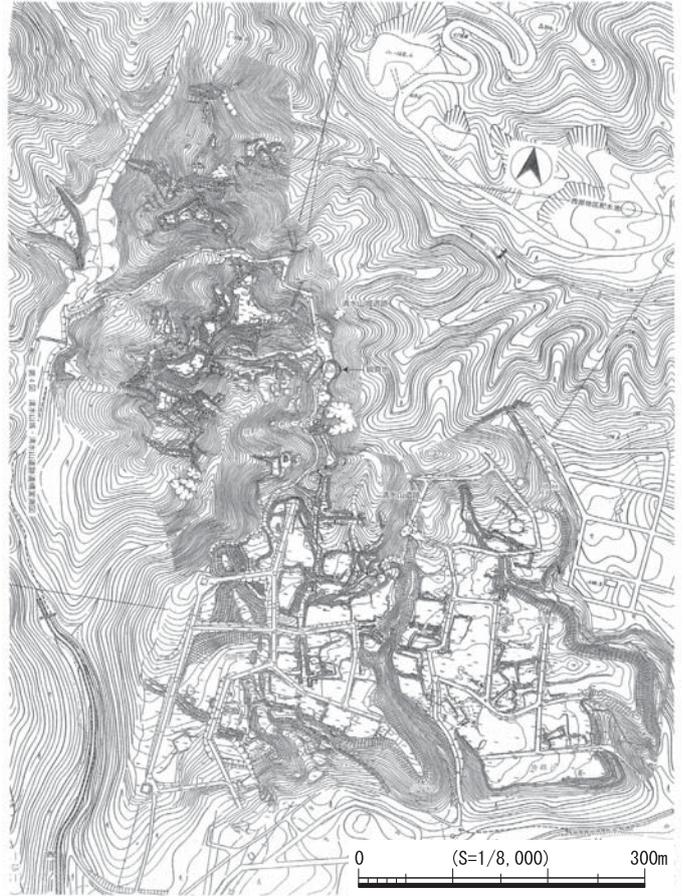


図4 清水山城・清水山遺跡遺構測量図

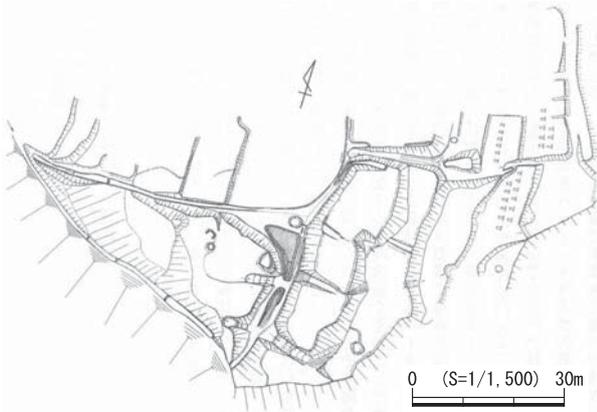


図3 南谷遺跡（大慈寺）概略図

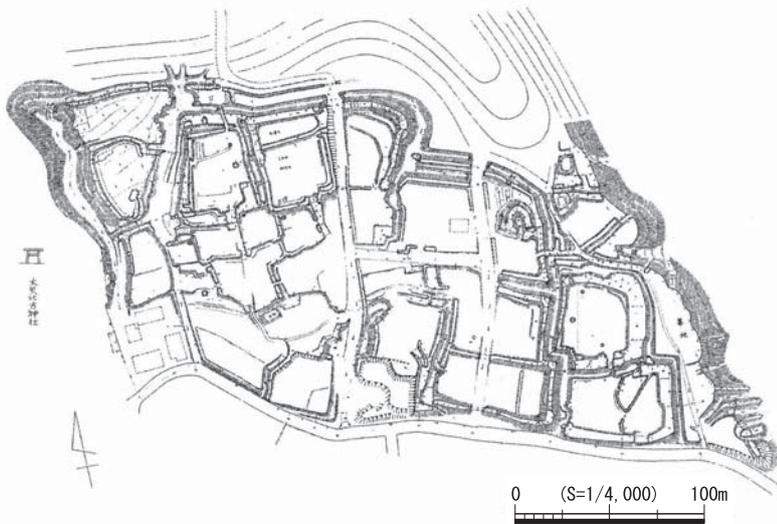


図5 本堂谷遺跡概略図



図6 太山寺城概略図

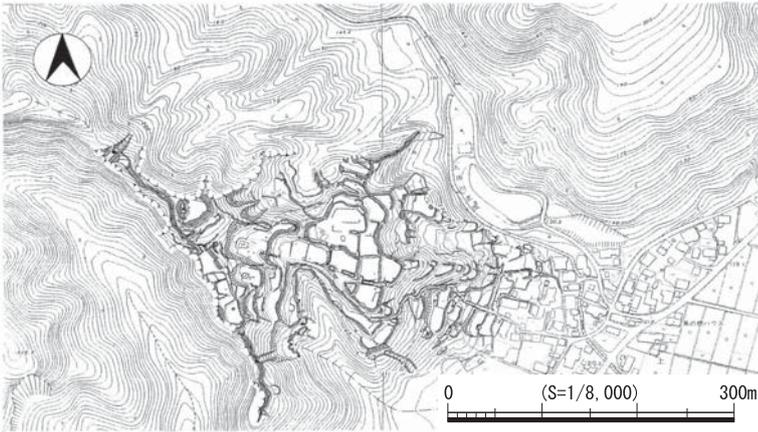


図7 上寺城・松蓋寺遺跡遺構測量図



図9 ダンダ坊遺跡概略図



図8 長法寺遺跡概略図

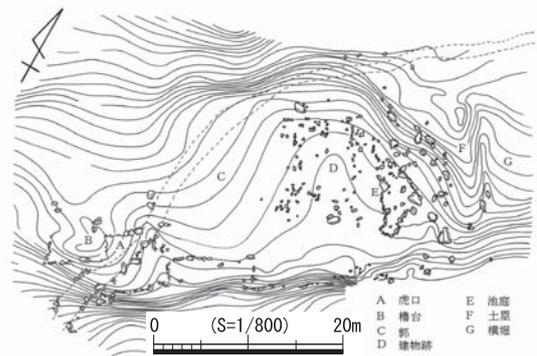


図10 ダンダ坊遺跡（庭園遺構）略測平面図

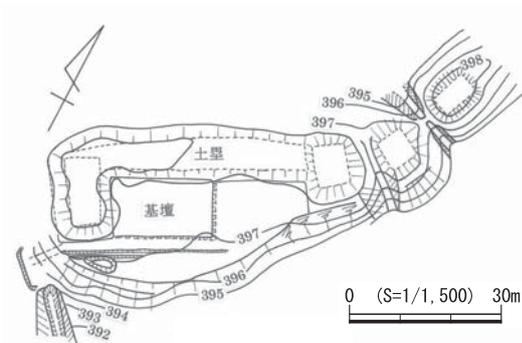


図11 野々口山城略測平面図

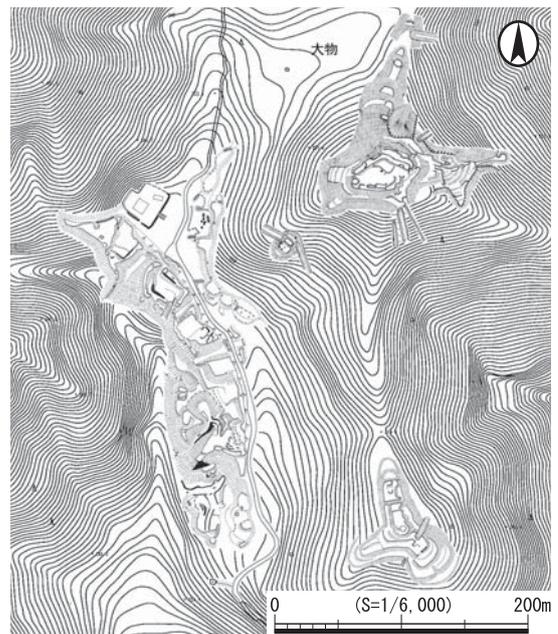


図12 歓喜寺遺跡概略図

り、石垣も各所に用いられるため、城郭に先行して山寺が存在していたとすることは妥当と考えられる。

法花寺に比定される野々口山城は、平坦面内に堂宇の基壇と推測される土壇と前面の空閑地となる平坦面を利用したとみられ、法花寺堂宇の跡地を再利用したものと考えられる。野々口山城は野々口丹波守の城と伝えられる。

4. 湖西地域における城郭化の動向

湖西地域での山寺の城郭化は、そのほとんどが16世紀中頃から元亀年間(1570～1573)に活発になる。

高島郡域では清水山城や上寺城にみられるように、15世紀後半頃から衰退が始まる山寺に入れ替わり、高島七頭などの武家勢力の動きが活発になり、山寺を城郭化していく。しかし、この城郭化の動きは、破壊あるいは大幅な改変といった前身構造を否定するものではなく、その構造を再利用、改修して徐々に取り込んでいく漸次的なものであったとされる⁽¹⁰⁾。このような武家勢力による城郭化と並行して、大慈寺と日爪城の事例のように僧名を名乗る在地土豪によっても山寺の城郭化の動きがあったことが推測される。

一方、滋賀郡域では寺院と城郭の関係を考える上で鍵となる、僧名を名乗る人物が築城に関わった可能性が示唆される文献史料や伝承が伝わる⁽¹¹⁾。ダング坊や野々口山城との関わりが示唆される野々口氏、平野部には田中坊が城とした福田寺と、木戸十乗坊の城とする木戸城の存在が確認できる。

法花寺に比定される野々口山城は、野々口丹波守の城と伝えられ、元亀争乱後も近世に至るまで「檀陀坊」の吏として野々口瀬平なる人物が南比良を治めていたとの伝承も残ることから、野々口山城の城郭化にはダング坊などの寺院と関わりを持つ野々口氏が関与していたことが推測される。

平地寺院である福田寺は、「宗教法人滋賀郡寺院明細帳」と『近江国滋賀郡誌』北比良村誌によれば、宇多天皇の皇子敦実親王の子である実光王が落飾して済信上人(田中坊)と称して草創したとされ、文明年間(1469～1487)に性賢が真宗に帰依したと伝える。また天台宗檀陀坊の里坊であったともする。『福田寺文書』には往古は田中坊と呼ばれ、横川先徳恵心僧都の草創した天台寺院であり、文明2年(1470)に性賢が真宗に帰依したことや、田中坊を城としていたことなどが記載される。草創については諸説あるが、福田寺が田中坊と呼ばれ、歴代住持が田中坊と称して城を築いていたことがわかる。

木戸十乗坊については、比較的多くの文献や伝承にその名が登場する。伝承などによると、木戸集落には永正年間(1504～1520)に六角氏に属していた木戸越前守秀貞が築き、元亀3年(1572)に織田信長によって攻略された際には、同じく六角方の佐野秀方(木戸十乗坊栄有)が城主とされる

木戸城が存在したとする。『馬場康二家文書』には元亀3年(1572)に馬場兵部丞が木戸の十乗坊城(木戸城)に立て籠もり信長軍に奮戦した功により、朝倉義景から賞され、浅井長政からは知行安堵されたことなどが記載される。『近江輿地志略』には「木戸古城跡」の記述に、荒川村・木戸村の間の山にあり、十乗坊あるいは木戸越前守という人物が在城したとしている。

このように滋賀郡域では、田中坊のような住持、あるいは「檀陀坊」と野々口山城との関わりが示唆される野々口氏や木戸十乗坊のような僧名を名乗る在地土豪が築城に関わっていたと考えられる。

5. おわりに

前節までにみてきたように、湖西地域における山寺の城郭化の動きは、推測の域を出ない事例もあるものの、15世紀後半頃から衰退する山寺に代わり、16世紀中頃から元亀年間にかけて漸次的に城郭化が進められたことが共通する。しかしその築城主体は武家勢力や、僧名を名乗る在地土豪、寺院の住持と様々であり、寺院と城郭の平面構造についての類型化は可能であっても、築城主体は単純に一括りに解釈できるものではないようである。そのため、特に城郭化された山寺には、様々なレベルの権力や要素が複雑に絡み合っただけで構成されるため、その対象を明確にする分析視点を模索する必要がある。

城郭化の動きには、寺院廃絶後にその跡地を利用しての築城か、あるいは衰退傾向にある寺院と共存、もしくは寺院を管理下に置いて取り込むことも想定され、「寺院」か「城郭」かという二元的なあり方ではなかったと考えられる。つまり山寺の城郭化という動きは、長い場合には数百年以上に及ぶ寺院史におけるひとつの現象であり、様々な内外的な要因が複雑に作用した結果に他ならない。地方に数多く残る山寺や城郭は資料が僅少であることが常である。本稿も伝承などを手掛かりとした安易な結びつけが多々あることは承知の上であり、その反面、今後の検討の余地が多岐にわたる。今後の叩き台として本稿を提供できればと思い執筆した次第である。

註

- (1) 沿革等については横井川(2006)を参考にした。
- (2) 沿革等については新旭町教育委員会(2002)、(2003)、高島市教育委員会(2006A)、(2006B)を参考にした。
- (3) (2)に同じ。
- (4) 沿革等については元興寺文化財研究所(1980)を参考にした。
- (5) 沿革等については安曇川町(1984)、高島市教育委員会(2008)を参考にした。
- (6) 長法寺遺跡の詳細は小林(2013)を参照されたい。
- (7) 沿革等については志賀町教育委員会(2004)を参考にした。ま

た、詳細については藤岡(2011)に詳しい。

- (8) 沿革等については志賀町教育委員会(2004)、志賀町誌編集委員会編(1999)を参考にした。
- (9) 歛喜寺遺跡の詳細は小林(2012)を参照されたい。
- (10) 高島市教育委員会(2006A)、(2006B)で指摘がある。
- (11) 志賀町教育委員会(2004)、志賀町誌編集委員会編(2004)等にみられる記載を引用、参考にして解釈した。

文献(著者名・刊行機関名50音順、刊行年順)

安曇川町(1984)『安曇川町史』

宇野健一(註訂)(1976)『新註 近江輿地志略 全』弘文堂書店

宇野健一(註訂)(1979)『近江國滋賀郡誌 全』弘文堂書店

蔭山兼治(1994)「戦国期城郭・天台宗山岳寺院の利用法について」『文化史學』第50号 文化史学会

元興寺文化財研究所(1980)『比良山系における山岳宗教の研究』

小林裕季(2012)「比良山系の山寺-大津市歛喜寺遺跡について-」『紀要』第25号 財団法人滋賀県文化財保護協会

小林裕季(2013)「比良山系の山寺(2)-高島市長法寺遺跡について-」『紀要』第26号 公益財団法人滋賀県文化財保護協会

滋賀県教育委員会(1991)『滋賀県中世城郭分布調査8(高島郡の城)』

滋賀県教育委員会(1992)『滋賀県中世城郭分布調査報告9(旧滋賀郡の城)』

志賀町教育委員会(2004)『比良三千坊関連遺跡 遺跡詳細分布調査報告書』

志賀町誌編集委員会編(1999)『志賀町史』第二巻

志賀町誌編集委員会編(2004)『志賀町史』第四巻

新旭町教育委員会(2002)『織田信長と謎の清水山城 - 近江・高嶋郡をめぐり攻防 - 』記録集 サンライズ出版

新旭町教育委員会(2003)『清水山城郭群確認調査報告書』

高島市教育委員会(2006A)『清水山城跡現況調査報告書』I-IV

高島市教育委員会(2006B)『高島の山城と北陸道 - 城下の景観 - 』記録集 サンライズ出版

高島市教育委員会(2008)『高島市内遺跡調査報告書 - 平成19年度 - 』

中井均(1997)『近江の城 - 城が語る湖国の戦国史 - 』サンライズ出版

中西裕樹(2004)「城郭遺構論からみた山岳寺院利用の城郭 - 戦国期城郭における削平地の配置場所 - 』『城館史科学』第2号 城館史科学会

藤岡英礼(2011)「『山寺』遺構の構造と解釈」『琵琶湖と地域文化 - 林博通先生退任記念論集』

米原市教育委員会(2009)『新視点・山寺から山城へ - 近江の戦国時代 - 』

横井川博之(2006)「日爪城」『近江の山城ベスト50を歩く』中井均編 サンライズ出版

挿図・写真典拠

図1 国土地理院1/25,000地形図「饗庭野」・「今津」・「北小松」・「勝野」・「比良山」・「沖島」に拠り作成。

図2・3 横井川(2006)より転載、一部改変

図4 新旭町教育委員会(2003)より転載、一部改変

図5 滋賀県教育委員会(1991)より転載、一部改変

図6 滋賀県教育委員会(1991)所収図を再トレース、一部改変

図7 高島市教育委員会(2008)より転載、一部改変

図8 小林が踏査・作図

図9 藤岡氏踏査・作図図面を一部改変

図10・11 志賀町誌編集委員会編(2004)所収図を再トレース、一部改変

図12 小林が踏査・作図

【編集後記】

本号は、縄文時代から近代までの、埋蔵文化財やその資料管理、建造物など、文化財にかかわる日頃の研究成果の集成、論考の再評価、等となっており、幅広い時期と事物を対象とした豊富な内容となりました。

本書が、文化財の保護と調査・研究の進展のため、広く活用されることを願います。(編集担当)

平成26年（2014年）3月31日

紀 要 第 27 号

編集・発行：公益財団法人滋賀県文化財保護協会
520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町 1732-2
(TEL) 077-548-9780 / (FAX)077-543-1525
e-mail: mail@shiga-bunkazai.jp
<http://www.shiga-bunkazai.jp/>

印刷・製本：マルキ印刷株式会社